
アンラッキーなラッキーボーイ

龍門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンラッキーなラッキーボーイ

【Nコード】

N3410K

【作者名】

龍門

【あらすじ】

天才と呼ばれる・櫛木屋慧。だけど何を思ったのか自殺をしてしまった。

でも生きてる。しかも知らない男が中に居る。男はマコトと名乗り、何故か身体をよこせと言う。

天才の慧と（でも最悪の塊）不良のマコト（でも良い奴）の変な同居生活が始まる！それと同時に、慧が通う学校・住む街で怪奇事件が起こる。

それがどう関わるかは読んでからのお楽しみ。

推理だけど、少しコメディー要素が強いかも・・・。

第1話 終わる筈だったのに始った（前書き）

榎木屋	慧	↓	カシギヤ	ケイ
筑波	詩乃	↓	ツクバ	シノ

一応ね。

内容は少しグダグダ気味に。BLではないよ。うん。これも一応。

第1話 終わる筈だったのに始った

彼は天才だった。

少し大雑把だったか？

否、この言葉以外に彼を現す言葉は無いだろう。

どんな人からも愛され、慕われる。

何でもこなせる天才。

皆口を揃えて言った。

『アイツは天才だ』と。

そう、だった……。

「心拍数低下！！先生！！」

看護師が慌てている。

当然だ。今ここで一人の人間の命が消えかかっているのだから。

「彗君ッ！彗君ッ！」

誰かが俺の名前を呼んでいる……。誰だ？少し幼く聴こえるが、綺麗な声。

「これはいかん！」

医者が叫ぶ。

そうか……。僕は死ぬのか……。

不思議と平気。死ぬの。

だってもう……。疲れたんだもん。

天才？まあ、そう呼ばれていた。神童とも呼ばれた。くだらない。

なんてくだらないんだ。

そんな大層な呼び名も、死ぬばただの音の羅列だ。

本当……。くだらない。

「彗！いやあああああ」

誰かが叫ぶ。さつき僕を呼んでいた人とは違う声。大人びた、いや、疲れ果てた声だ。

「目を覚ませ彗！！」

次は男の声だ。誰だ？こちらも疲れ果てている。

「お願い！目を開けて！！！」

この声はさつき聞いた。

てか……君達は誰だ？

医者が僕の胸に何かを当てた。そして叫ぶ。

「離れて!!」

ああ、お決まりの……。

もし死んでも『最善を尽くした』と言い訳をする為の行為……くだらない。

死なせてくれよ……頼むから……。

「俺 良い」

え？誰か喋った？聴こえない・・・ああ、もう死ぬのか僕。

「お前——俺が——返っても良い——」

誰だ？男の声。しかも俺と変わらない歳の。誰？それよりも、何て言っているの？聴こえない。

「お前が死ぬ――俺が――返っても良いか？」

何だ？少し聴き取れるが、意味は解らない。
僕が死ぬ・・・で何だ？

「お前が死ぬなら俺が生き返って良いか？」

は？今・・・は？

死の間際でこれか？おいおい・・・神様これは何て言う仕打ちだ？

確かに・・・僕は自ら命を絶とうとした。でも、死の間際にこれは・・・悪趣味過ぎる。

「知らねえーよ。お前の事は。俺は生き返れば良い」

随分口の悪い。きっと僕はこの男とは友達にはなれないだろうな。

「だから知らねえーって。ホントはお前みたいなカスの身体借りるなんて嫌だけだよ。我儘言えない状況なんだよね」

何言っている？意味が解らない。理解出来ない。それより君は誰だ？

「説明する意味あんの？」

・・・それもそうだな。どうせ僕は死ぬんだ。聞いても意味は無い。

「そつだよな。だから説明はしない。てか、面倒だからしない。んで、時間ないから俺もっ生き返るわ」

時間？何の話だ？

「だから説明する意味あんの？」

口調が荒いな。これが最近の若者ってやつか？世も末だ。

「自殺きめこんだ奴に言われてくねえーよ」

ふんっ！僕の気持ちが君に解るか？解らないだろ？君みたいな奴に僕の気持ちなんて。

「はあ？何で俺が自殺したお前の気持ちを理解しないといけないの？てか、死ぬ奴の気持ちなんて理解したくないわ。んじゃ、もう時間だ。もうそろ、お前も迎が来るぜ？」

なっ！おい！どう言う意味だ？迎え？時間？何だそれは？説明しろ！！！！

と言つか、君僕の事馬鹿にし過ぎじゃないか？名譽棄損で訴えるぞ？って、今のは冗談だけだね。てか、何とか言えよ！オイ！オイ！オイ！

「おいおいおいおいおいおいおいおいおいおい！！！！！！！！！！」

起き上った。叫びな・・・起き上った？いや、死ぬ人間が起き上った？じゃ、ここは天国つてやつか？まあ、僕は死後の世界なんて信じないけど・・・あれ？

辺りを見渡す。医者・看護師二名。

それに・・・。

「慧！」

疲れた顔をした女性。 あっ・・・母さん。

「慧！」

こちらにも疲れた顔をした男性。 あっ・・・父さん。

「慧君！」

僕と同じ年であろう女の子。 あっ・・・幼馴染の詩乃。

「奇跡だ・・・」

医者が涙を流しながら呟く。

奇跡？何が？

父さんと母さんが老けた事？

「良かった」

看護師二人が涙を流しながら呟く。

何が？この様子だと・・・俺、死に損ねた？

父さん、母さん、そして詩乃が僕に抱きつく。

そして涙を流しながら「良かった」を連呼する。

は？何が？何が良かったの？俺死に損ねたんだよ？

じゃあ、あの飛び降りて看板にぶつかった痛みは？
無駄？あんなに痛かったのに？無駄？

おいおい・・・嘘でしょ・・・。

「大丈夫か？彗！？大丈夫か？」

父さんが僕の肩を掴みながら尋ねる。
あつ・・・何か言わないと。

「うん。大丈夫だよ」

笑顔。作り笑顔。

その顔を見て、僕の周りに居る父さん達は安堵の笑みを浮かべる。

騙されている事に・・・気付いてすらいない。

僕は今まで演じてきた。天才なんて言われたから、演じた。周りのイメージが壊れないように。演じた。

そして、皆そんな僕の演技に騙されていた。簡単だ。
アカデミー賞貰えるだろうな、僕。

『はんつ！ただの詐欺師だろ？もしくはペテン師』

頭に声が響く。ああ、事故のショックか・・・。これ後遺症とか残るかな？

『何ホザいてるの？テメエーのせいで成功しなかったんだぞ！？何でお前生き返るのかなあああああ！』

五月蠅い。と言うか、この声さつきも聴いたな・・・。

『思い出さなくて良いよ。どうせお前追い出すし』

何言っているんだ？この天の声は。

『おいおい。俺をバラエティーとかのと一緒にするなよ。てか、くたばれよ。速攻で。音速で』

ああああああ！君はさつきの！？

『思い出さなくて良いって。面倒だから』

君、さつき僕の事無視しただろ！？僕が――。

『おいおい・・・。何かお前の周りの奴がお前の事見ているぞ。何か不思議な目で』

あつ！辺りを見渡す。

父さん達が僕の事を見ている。

声・・・出ていたのか？いや・・・これは心配する目だ。多分僕が黙ってしまったから心配しているんだ。

『ご立派な推理だな。三流小説も真っ青だな！』

五月蠅い。

僕は一度目を瞑り、そして笑顔を作った。

『詐欺師スマイル!』

黙れ。

「大丈夫だよ・・・少し疲れているだけだから」

僕がそう言うと、また皆安堵の笑みを浮かべる。

まあ、その心配はごもつともだよ。だって10階のビルから落ちたんだ。それなのに生きている。奇跡とも言いたくなるさ。

『10階? 中途半端だな。飛び降りるなら高層ビルとかから落ちたよ』

黙れ。

「そつだな・・・彗は暫く休んでいなさい」

父さんは僕の肩を掴んだまま、僕を寝かした。

別に眠たくないけど、ここは言う通りに。

「大丈夫? 辛くない?」

母さんが僕の手を握りながら尋ねて来る。

僕は笑顔で「大丈夫」と言う。

「ホント?」

幼馴染の詩乃が身を乗り出し尋ねる。

・・・何で詩乃ここに居るの？

まあ、一応笑顔で頷く。

それを見て、詩乃は笑みを浮かべる。

『へえ、可愛い幼馴染だな。テメエの女か？』

頭の中でゲスな男が喋る。

『おいおい。ゲスは酷えーな。てかお前も十分ゲスだろ？人騙しているんだからな』

何言っているんだ？僕は誰も騙してない。これはただの演技だ。

『どの口が言っているんだ？騙して快感を得ている様な変態さんが？』

なっ！何を言っている！！！！

『動揺してんなあ。まあ、俺はお前の事何でも知ってるからな！』

なっ！何を出鱈目な！

『榎木屋慧。17歳・高校2年。成績優秀・運動神経抜群・容姿はソコソコ。誰にでも慕われ、そして天才と呼ばれる超の付く人間』

うんうん。良く解っているな。

『その半面。自分以外の人間を下に見て、ある不良を使って邪魔な人間を排除。人を騙す事に快感を持っており、多数の詐欺紛いの事をしている。だが、父親が警察のお偉いさんの為下手に手出しできず、皆逆らえない』

なっ！で、で、で、出鱈目だ！

『見事な裏表だな。てか、裏の方が酷いな。こりゃ〜やつぱり死ねば良かったんだ』

何勝手な事言っているんだ！？てか、何で君の声が僕の頭の中で響いている？これは何だ！？

『ちなみに好きな女のタイプは年下』

何言ってるんだああああああ！！！！！！？？？

『ああ〜だから幼馴染が側に居るのか。タメでもこの子、少し幼く見えるもんな？てか・・・ロリコン？痛いなあ〜』

だから！さつきから勝手な事言っなよ！てか、僕の質問に答えろ！

『質問？ああ〜俺は顔で女は選ばないよ？』

そんな事聞いてない！！！！！！

『でも胸はあった方が良いかな？あるに越した事はないからな！』

だ・か・ら！！！！！！どうでも良いよ！そんな事！！

『短気だな。俺にも表みたいに接しろよ』

接して、僕になんの得がある？

『損得で動くとお前人間ダメになるぞ？』

ふんっ！損得で動かない人間がどこに居る？

『俺とか』

それは嘘だな。

『決め付けないよ！！俺は情にアツい男さ！』

本当五月蠅いな、君。

『・・・・・・・・・・』

おい？

『・・・・・・・・・・』

無視か？

『・・・・・・・・・・』

・・・・・・・・寝るか。

僕は考えた。多分暫くは退院出来ないだろう。

両親が過保護だからだ。短くても一ヶ月か？

まあ、面倒な学校に行かなくて良いだろう。

それよりも、この僕の中に居る男をどうするか……。

ああ、ダメだ。眠い。もう……。

男は漂っていた。まるで重力が無い様に、身体が浮いている。

『これは、これは……酷いな』

思わず呟いた。

この身体の持ち主である、榎木屋彗。思った以上に酷い。

男は記憶を漁っていた。榎木屋彗の記憶だ。本人が忘れている事も、脳は覚えている。

だからここは、榎木屋彗の弱みの宝庫だ。

『だが・・・口にできない様な事ばつかだな・・・』

脳の中。まあ、今はこのような表現の仕方が正しいだろう。

だが、別に血管が通っていたり、何かグロイモノが有る訳ではない。

脳の中。まあここでは【ブレインルーム】と呼ぼうか。
だが、【ブレインルーム】と言うけれど・・・。

ぶっちゃけると、図書館だ。

榎木屋替の・・・ここでは【主】と呼ぼう。

その【主】の【ブレインルーム】だが、ここは【主】は干渉出来ず、唯一この男が自由に何でも出来る。だから図書館なのだ。
男は見るよりも読む方が覚えやすいと思い、このような形にしたのだろう。

本棚は全部で5つ。

【主】の過去の記憶が書かれている書物が入っている棚。

【主】の今までの思考や行動・性格が書かれた書物が入っている棚。

【主】の今まで覚えた知識が書かれた書物が入っている棚。

【主】の夢・理想などの事が書かれた書物が入っている棚。

【主】の周りの人・物の事を書き込んである書物が入っている棚。

端から。

【古書】

【シナリオ】

【雑学】

【夢物語】

【エキストラ】

とても名付けようか。

男は【エキストラ】の本を一冊手に取り、ページをめくる。

『……これがあの子か』

ページの結構最初の方に書かれている。

筑波詩乃。 17歳・高校2年。容姿端麗・才色兼備。だが、容姿が少し幼く。それがコンプレックス。幼馴染。両親が2人とも教師。容姿の事を言うとき激怒する。少し天然。運動は苦手……。おい、この後に書いてある事は口に出したらヤバそうな事だぞ？

絶句した。説明が短い。殆ど18禁な事書いてるよ。

軽く犯罪の匂いが……。

この子も可哀想に。幼馴染がこんな変態なクソ野郎なんて。

その後も男は様々な本を手に取り、読み漁って行く。

暫くし、男は読んでいた本を棚に戻し、背筋を伸ばした。

『んんんっん……いあやあゝ疲れたな』

服装は白いワンピースの様な・・・ごめん、俺あんまり詳しくないから説明出来ないわ。

そんな可愛い少女が、本棚の後ろに隠れながら『誰?』と言っている。声も年相応の可愛いモノだった。

『俺に聞いてるのか?』

ワザと惚けた感じに聞き返す。俺以外誰も居ないから俺に決まっているのだが。

『・・・うん』

コクリと少女が頷く。

俺・・・ロリコンじゃないけど・・・可愛いな。

・・・はっ！危ない・・・もう少しで何か大切なモノを捨てる所だった。

『で?どうした?』

俺は少女を見ながら聞いた。だが、目が合つと、何故か少女は俯く。

嫌われたか?

『誰?』

少女は俯きながら聞く。

素直に名前を言おうか悩んだ。でもここで言わなければ、俺の子に完全に嫌われるな。

子供に嫌われるの、嫌だからなあゝ・・・。

『俺は・・・マコトだ。マコト!』

カタカナ表記。理由は・・・なんとなくだ。

『・・・マコト?』

少女が俺の名前を呼びながら顔を上げる。

『そうだ』

俺は少女を見てゆっくり頷く。

『マコト・・・怖い人?』

いきなり。俺なんかしたか?

『違うよ。俺は子供には優しい』

本当の事。下に、弟と妹二人が居た。そのせいか子供が好きだった。

世話したり、遊んだりするのが。

ああゝこれがロリコンって言うのか?

定義は解らないから何とも言えないな・・・。

『……ホント？』

尋ねる少女。

『ああ、嘘はつかない主義だ。秘密主義だけだな』

少女は表情をパアとさせ、俺の方に近づいて来た。

『私のね！私の名前はね！ミミって言うの！このね、耳と同じ名前！』

満面の笑顔で、ミミと名乗る少女は自分の両耳の耳たぶを摘み、俺に言う。

良い子だなあ。しみじみ思う。

『そうか。可愛い名前だな』

俺もその満面の笑顔に、笑顔で返す。

可愛いと言われたのが嬉しかったのか、ミミはその場でぴよんぴよん跳ねた。

何でこんな子が……。

俺は考える……まさか……いや、決め付けるのは早過ぎる。

まだ考えの範疇に収めておこう。

一人で納得する。

『どうかしたの？』

ミミは俺の顔を見ながら聞いてくる。

てか、いつの間にかミミは俺の前に座り込んでいた。

『大丈夫だよ』

顔に出ていたのか。柄にも無く考えたりしたからか。

『ホント？』

再度ミミが確認する。俺は笑みを浮かべ、『大丈夫だ』と再度言う。

ミミは満面の笑顔で、俺の耳たぶを摘む。

『なっ！？』

いきなりでビックリし、情けない声を出す。

『ミミはどこにでも居るんだよ？だから大丈夫だよ？』

意味は良く解らなかった。けれども、何故かホッとする。子供の温かさが俺の中に流れてくるようだった。

『そつだな・・・ありがとう』

俺はボソツと呟いた。ミミは笑顔で首を傾げる。聞こえなかった様だ。聞こえる様に言っていないから当然か。

『ありがとう』

でももう一度言い直した。なんとなくだ。

するとミミは嬉しそうな顔をする。

ああ、世の中残酷だ・・・。

不意に、思ってしまった。

第1話 終わる筈だったのに始った（後書き）

誤字脱字の指摘があればどしどし。

自分で読み返してないから何とも言えない。
だって長いもん！

あんまり今は書くことないかな、次の後書きはいつぱい説明を書きたいと思います。

それにしてもミミ可愛いな・・・別にロリじゃないよ!？

ええーでは次回・・・。

第2話 ドッペルゲンガー（前書き）

この物語は、様々な現象を独自の考えで説明します。
でもそれはフィクションです。でも真実も書きます。

一応です。

第2話 ドッペルゲンガー

目覚めたら、天井は真っ白だった。

暫く考える。何故なら僕の部屋の天井は灰色ぽい白だからだ。

「ああ、病院か」

少し考えてやっと理解する。

「何か・・・変な夢を見た気がする」

夢と言うのは、僕の頭の中で響く声の事だ。

訳の解らない夢だった。何かの暗示だったのか？いや、もう過ぎた事だ。気にする事はないだろう。

「そうだなあ、気にしなくて良いから身体よこせよ？」

早く退院したいなあ。

「あれ？シカト？」

病院のご飯は不味いつて言うしな。

「シカトは立派な苛めだぞ？」

病院独特の匂いも嫌いなんだよな。

『苛めカツコ悪いぜ?』

もうひと眠りしようかな・・・。

『・・・高1の時、小学校高学年の女の子の——』

「おおおおおおおおおい!!!!!!」

思わず声に出して叫んでしまった。

『いやいや、ここまで来ると変態以上だよな?もう死んじゃえよ?』

そんな軽く言っな。てか、喋るな。頭に響く。

『響くのは仕方が無い事だ。むしろ痛みを感じる事に有難味を感じる。生きているって実感できるだろ?』

知らないね。俺は死にたかったんだ。

『なら死ねよ?』

死んだら君が僕の身体を使っんだろ?

『そっだよ?』

それならそんな簡単に死ねないね。僕の身体で何されるか解らないから。

『ロリコンの変態に言われたくないな』

僕はロリコンじゃない！

『アブノーマルなお前が何言っても・・・』

・・・もう良い。何言っても信じてくれないなら。

『おいおい。何言ってるの？お前の事は俺全部知ってるぞ？』

君こそ何を言っている？

『お前が寝ている間に、お前過去とか色々読んだ』

は？どうやって？しかも読んだ？

『説明するの面倒だなあ。まあ、お前の脳から読み取ったって事だ。うん。面倒だからそれでいいか』

適当過ぎないか？てか、僕のプライバシーは？

『そんなのねえーよ。諦めな！』

最悪だよ・・・。

『お前が生き返るからだろ？』

気付いたら生き返っていたんだよ。

『一体お前にどんな奇跡が起こったんだろうな』

知らない。それに奇跡なんて信じないよ。そんな訳の解らないモノ。

『それは俺も同意見だ。俺は見て、聞いて、感じたモノしか信じない』

それにも僕は同意見だ。天才は見えないモノは信じない。

『自分の事天才って言ってるよ・・・痛いな』

事実だからね。

『そこまで来ると、逆に清々しいな』

どうも・・・。

『別に褒めてないけど』

まあ、多少この感じに慣れてきたから、色々説明してくれないか？

『ん？昨日はかなり否定的だったのに』

僕の事は何でも解っているなら聞かなくても良いだろ？

『いや、記憶を読んだり、思考を読んだり出来るのはお前が気絶してるか、寝ている時かのどっちかなんだよ』

つまりは意識が無い時か？

『そうだ。だからそれ以外はお前が直接教えてくれないと俺は解ら

ない』

便利の様で不便だな。

『ここは前向きに、便利だと思う事になっている。で、聞きたい事は？』

まずは君の名前。

『色々事情があつて名前しか教えられないが、マコトだ』

事情って何だ？

『俺の事がバレる可能性が有るって事だ』

どう言う意味？

『長くなるが良いか？』

それで僕が納得出来るなら。

『ヨシ。じゃあー暫く喋らせてもらつ』

どうぞ。

『俺は実は一度死んでいるんだ。交通事故でな。それ程外傷は無かった筈なんだが、死んだ。打ちどころが悪かったらしい。それでな、俺はお前と同じ体験をしたんだ。誰かに話しかけられた。「身体をくれ」ってな。俺は抵抗する暇なく、身体を取られた。つまりは、外見は俺だが、中身は俺じゃない誰かがこの世に存在しているって

事だ』

成程・・・。

『それでだ。俺はそいつと同じ方法でお前の身体を取ろうとした。目的は自分の身体始末する事だ』

何故？

『これは俺の推測だが、俺は多分自分の身体には戻れない』

何故その考えに至ったんだ？

『色々無理やりな所はあるが、俺の身体を取った奴が言ったんだ』

何て？

『「自分の身体に拒絶された事があるか？」ってな。何でそんな事を言ったかは解らないが、多分興奮して思わず口走ったと思うんだ』

成程ね。拒絶って事は入れなかったって事か。

『俺はこの現象の事を「ドッペルゲンガー」って呼んでいる』

自己像幻視？何故だ？自己像幻視は第三者、又は自分が、自分と瓜二つの自分を見る事を指している。でも君は自分を見ていないだろ？

『これは俺の憶測って言うか、考えだが。初めてドッペルゲンガーを体験した奴って、俺と同じ体験をして、身体を取られ、他人の身

体を奪って自分を見たからだと思うんだよ。そいつが、多分「アレは俺なんだ」とか他人に言っつて、それが広まったんじゃないのか？」

無理矢理だが、間違いとも言えないな。では、死期が近い人間が見るつて言っつ伝承は？

『多分身体を取った奴が、殺したんじゃないか？中身が違っつてバシたら面倒だから』

成程。それで自己像幻視は他人に中身がバレないように話さないのか。多少のズレは有るが、それも一つの考えだな。

『それでだ。俺は自分を探したい。俺は存在してはダメだからな』

ダメとは？

『それは秘密だ。俺は、嘘は吐かないが、秘密主義だ』

秘密主義なら僕の事も黙っつていろよ？

『お前の秘密はお前を脅す時に使っつ』

あつ・・・そう言えば君は他人と喋れないんだよな？身体無いし。なら心配する事はないか。

『いや、俺お前の身体の主導権は奪える』

は？

『これは二重人格つて感じかな。人格が切り替わるつてあるだろ？

それと同じで俺とお前の人格をチェンジする事も出来る』

なっ！？

『でもある一定の時間が過ぎたら、強制的に人格が主人格のお前に切り替わる』

その一定の時間とは？

『教えない』

変な所で秘密主義だな。

『まあ、大丈夫だ。切り替わっても変な事はしない。お前のイメージが壊れたら俺も色々動きづらいからな』

・・・解った。でも勝手に替わるなよ。一言言え。

『ああ。約束する。それと、俺は人格を替えられるが、お前は無理だから』

何？

『もし、俺がお前と人格を切り替えても、お前が自分で切り替える事は出来ない』

不公平だろ！？何で君に出来て僕に出来ない！？

『知らね。嫌われてんじゃね？』

誰に！？

『知らね』

．．．．しょうがないと腹を括るしかないな。

『思った以上に理解するのが早いね。普通なら混乱するが？』

天才は一味も二味も違うんだよ。

『自分で言ったよ』

まあ、君を探すのは手伝うが、それは退院してからで良いだろ？

『ああ。ワザワザ病院抜け出す事もないからな』

それじゃ．．．もうひと眠りしようかな。

第2話 ドッペルゲンガー（後書き）

ええー彗も言っていました、マコトの自論は結構無理やりです。

少し意味が解らないところもあつたと思いますが、それは作者の力不足です。

あれ、てかミミ出てないな。今度いつ出せるか・・・。

次も読んでください。

第3話 第1章・【神隠し】編Ⅱ事件発生（前書き）

ええー最初の事件です。王道の【神隠し】です。
これも独自の自論で解説・解決かせます。

第3話 第1章・【神隠し】編Ⅱ事件発生

街灯が照らしきれない場所。もしくは街灯が無い場所。

そんな所に現れる。音も無く忍び寄り、攫って行く。

どこに連れて行くの？

どうして連れて行くの？

あなたは……誰？

僕が生き返って一週間が経った。

僕はやっと退院出来る。

両親はもう少し入院させたがっていたが、大丈夫と言い切り、退院する事になった。

まあ、大丈夫なのは本当だからね。

「お世話になりました」

見送りに来てくれた医師と看護師に軽くお辞儀をしながら言う。

「いえいえ。無事退院出来てなにより」

白髪に、無精髭を生やした医師が腕を後ろに組みながら言う。

「本当にお世話になりました」

僕の隣に居る母さんが医師に頭を下げる。

「元気でね」

看護師が僕に言う。

「はい」

看護師に軽くまた頭を下げる。

父さんは仕事で来てはいない。警察って言うのは忙しいらしい。

「それでは。行くわよ、彗」

母さんが僕の腰に手を回し、車の中に誘導する。

僕は車に乗り、溜息を吐く。疲れた。

母さんは運転席に乗る前に、もう一度医師と看護師に頭を下げる。

やっと家に帰れる。

そんなに家は好きではないが、病院よりはマシだ。

車はゆつくりと動き出し、病院から遠ざかる。

家に着き、母さんと軽く話した。

でも、どうして僕が死にかけたかとかの話は出てこなかったし、聞かれなかった。

母さんもその話には触れられないのだろう。

軽く話し、そして軽く食事をして、僕は自分の部屋に戻った。

「ふう」。疲れた」

疲労が溜まっているのだろうか、今にも眠ってしまうぐらいの疲れだった。

『ストレスじゃねえーの？』

それもあるかもね。

この頭に響く声にも慣れた。プライバシーも何もないが、良く考えれば、僕の事を一番理解している理解者と言つ見かたも出来る。

それに、今考えている事は、マコトには解らない。それだけでも有り難いものだ。

『明日から学校に行くのか？』

ああ。そうだね。休み過ぎもダメだろうし。早めに行こうかな。

『お前が通っている学校って、卿宝なんだな。スゲー頭良い所じゃん』

凄いつて程ではないよ。そんな学校にも不良はいる。

『偏差値高い学校にも居るんだな』

頭の良い不良ってどうかと思うけどね。

『それも一種のストレス解消じゃね？』

それもそうだね。

何か疲れたから。もう寝る。

『そうだな・・・明日からまた忙しくなりそうだし』

忙しく？

『あんまり良い予感がしねえーんだよ。俺の勘は当たる』

その当たる勘で自分の死も感じられなかったのかい？

『残念ながらな』

不便な勘だ。

『さっさと寝ろ。変態ロリコン野郎』

言っな!!!!!!!!!!

眠りにつくのはそれ程遅く無かった。

深夜1時。夜道

「ハアー、ハアー、ハアー」

女性は息を切らしながら、地べたにへたっていた。
そして、怯えている。その怯え方は異常だった。

「なんで・・・何で！！アンタは・・・何なのよ!？」

叫ぶ女性。だが、その場には誰もいない。幻覚でも見ているのだろうか？

だが、女性は確かに何かに追われていた。

「どうして・・・どうして私なの？」

呟く様に、女性は言う。

カツツ——カツツ——カツツ——……………。

足音が響く。

その足音聞いた女性は、身体をビクツと震わせ、ぎこちなく振り返る。

「サトウ……………」

低いかすれた声。

「——きゃあああああああ」

そこに断末魔の様な女性の叫び声が、響いた。

卿宝学院。結構有名な高校だ。
そこに、僕も通っている。

だが、あまり学校は好きではない。

学校と言うのは格差社会と同じなのだ。

先輩・後輩。それだけで自由な発言はなくなる。
教師・生徒。この学校内では、教師の発言は絶対である。

こんなつまらない所で、何を学べと？

僕は校門の前に立ち、校舎を見る。

開校100年とは思えない程の綺麗な校舎。

この校舎は3代目の筈だが。建築されたのは50年前だ。

そう考えもやはり綺麗だ。

まあ、綺麗なのは校舎だけ。通っている生徒や、務める教師は一部を除いて腐っている。

「あつ！彗君！」

後ろから僕の名前を呼ぶ声がし、振り返る。

後ろには幼馴染の筑波詩乃が立っていた。外見は幼いが、一応僕と同じ年だ。

詩乃が僕の側に走り寄って来る。

僕は軽く手を挙げ、挨拶をする。

「あはよう。詩乃」

そう僕が言うと、何故か詩乃が不機嫌そうな顔をする。

「他に言うこと無いの？」

他に？何だろう。なんかあったか？

『心配かけてごめんとか、そんなんじゃないか？』

頭の中にマコトの声が響く。

そうか・・・。

「心配かけてごめんね？」

頭を掻きながら謝る。

僕が謝ると、詩乃は笑顔になった。

「うん。許してあげる」

そう言つて詩乃は僕の手を引つ張り、学校の敷地をまたぐ。

「早く！授業遅れるよ！？」

「分かつたから。引つ張らないでくれよ」

詩乃と僕は、小走りに校舎の中に入つて行く。

『流石俺』

そんな事を言っているマコトは無視した。

「あつ、そうだ。彗君知ってる？」

教室に行く間に、詩乃が僕に尋ねてきた。

「何が？」

「最近ニュースで報道されてるんだけどね」

ああ、そう言えば最近テレビ観てないな。
「うん」

「ここ数週間で人が何人も失踪してるんだって」

失踪？何人って言ってもたかが知れているだろ？最近のテレビもネタが無いんだろうな。

「へえー。でも、ただの蒸発なんじゃないの？」

「でもね。消えた人は皆衣服がその場に散乱してるんだって」

「その場って？」

「人が消えた場所」

衣服が脱ぎ散らかしてあったから、その場所が解ったのか。
でも、可笑しな失踪だな。何故衣服？と言う事は失踪した人間は
全裸なのか？

「でね。最近ではこの失踪の事を、【神隠し】って言ってる」

「【神隠し】？衣類だけ残して？」

「うん。可笑しな話しだけど。人って何かの現象に、直ぐ名前を付けたがるでしょ？だからじゃないかな」

『確かにな。俺も名前付けた方がしっくりくる』

君の意見はどうでも良いよ……。

『まあ……そうだな』

それにしも、【神隠し】って……。皆どっかの温泉に行っているのでは？

『そのボケ面白いな！？』

反応しないでよ。恥ずかしい。

「ねえー、聞いている！？」

詩乃が僕の顔を覗きながら尋ねる。

「ん？聞いている」

全然聞いてなかった。

「もうダメ……アレ」

詩乃が何かを見つけ、その方を指差す。

「ん？」

僕も指が差された方向に目をやる。

アレは……。

『獅子旗藤太郎か』

知っているのか？

『お前の記憶を見てな。確かこの学校では珍しい不良で、お前のパ

シリか』

パシリ・・・。

『間違つてないだろ？お前あの不良使つて色々やつてたんだろ？』

人を悪者みたく言わないでくれ。

『いやいや。お前は十分悪役だよ』

マコトは笑いながら言う。頭にくる。

獅子旗藤太郎。まあ、マコトが言つた事は真実だ。

僕はアイツを使つて、この学校の不良を排除させていた。アイツは喧嘩でしか能力を発揮できない奴だったから。

「詩乃行こう」

僕は詩乃の背中を押し、教室へ向かう。

「え？良いの？話しなくて」

詩乃は、僕と獅子旗は仲が良いと勘違いしている。

「今は別に話す事ないから」

僕がそう言つと、詩乃は不思議そうな顔をしていた。

君の言っていた勘つて、獅子旗が絡んでいるのか？

『いや・・・どうかな』

その勘本当に当たるのか？

『100%とは言えないが・・・それにしても・・・』

どうかしたか？

『いや・・・別に』

変な奴だな・・・。

『お前に言われたくないわ。変態』

君・・・それいつまで言うんだ？

『一生』

・・・あっそう。

僕はコイツに一生変態と言われ続けるのだろうか・・・。

第3話 第1章・【神隠し】編Ⅱ事件発生（後書き）

ええー少し彗のキャラ良い奴なっているような。

駄目なんですよ、それじゃー。作者の中では彗は最悪な人間にならないと。

でも、それじゃーマコトの暴言とかが目立たなくなるから、程々に抑えていきましょう。

ええー第一の事件、【神隠し】ですがこれは伝承とかそれはあんまり関係しません。

これは失踪事件の名称なので。
推理とか・・・出来るかな？

ええー次も読んでください。

第4話 第1章・【神隠し】編Ⅱ不良到来（前書き）

獅子旗 藤太郎 ↓ シシハタ トウタロウ

一応。

第4話 第1章・【神隠し】編Ⅱ不良到来

今日の授業が全て終わった。

僕はさっさと帰る支度をし、教室を出た。
学校はあまり好きではないのだ。

『もう帰るのか？』

ああ。居てもつまらないし。

『なら——替われ』

えっ？

マコトがそう言った瞬間。僕の視界が途絶えた。

「……………よし」
軽くガッツポーズ。

「切り替え成功。アイツの声がしないって事はアイツ、寝ているんだろっな、まだ」

久し振りだな、歩くの。

人格を切り替えた。つまりは、慧からマコトに替わった。

「さてと・・・探すか」

マコトは辺りを見渡し、ある人物を探した。

「あれ、慧君どうしたの？」

遠くの方でコイツの名前を呼ぶ声がした。コイツの事を慧君と呼ぶのはこの学校で一人しか居ない。

俺はその声の主の方を見た。

筑波詩乃。コイツと同年なのに、見た目が幼い。

「ちょっと人を探しているんだ」

アイツと同じ口調で喋る。

「人？誰々？」

この子と思った以上に厄介かもしれないな・・・。

答えると不振がられる為、やんわりとこの場を回避する事に。

「ん、内緒」

俺は秘密主義だから。

「ええー、教えてよ」

思った以上にしつこいな・・・。

ここは直ぐにでも退散した方が良いな・・・。

筑波詩乃のしつこさに少し引いてしまった。

こんな時、コイツみたいな理解力と、空気を読む才能は必要だと思うよ。ホント・・・。

「お・・・僕ちよつと用事があるからもう行くね」

そう言って俺は小走りでこの場から離れる。

後ろから筑波詩乃の、「ちよつと待ってよ」と言う声が聞こえるが、今は無視だ。

明日きつとコイツは、筑波詩乃に質問攻めに合うだろうが、それは俺には関係ない事だ。

心の中で俺は、クスクスと笑っていた。

んゝ、道に迷った。

この卿宝学院は思った以上に広がった。第一校舎と第二校舎が在

るだけで十分に広い。

ヤバいな・・・この歳で迷子か・・・？

俺は一度歩くのを止め、脳内に声を響かせた。

ミミ？ミミ？

『マ、マ、マ、マコト！？？？』

何か慌てているなあ。何かあった？

『何かね！何かね！何かね！ここに知らない人が寝てるの！』

ミミが言うこと言うのは【ブレインルーム】の図書館だ。

それに、誰かって言うのは彗だろう。ミミは人見知りなのだろうか？

ああ、その男はそのまま寝かせといて。

『この人悪い人？』

ん、寝てれば無害かな？

『・・・悪い人じゃない？』

返答に困るな・・・。悪い人だけど、悪い人と言ったらミミは怖がるだろうし。ここは嘘を吐くか・・・。

悪い人じゃないよ。

『……嘘だ』

子供の勘は凄いと思った。

子供は自分の感覚、つまりは直感で行動し、思考する。そんな直感が、この男は悪い奴だと感じ取った。

でも、ここでミミに怖がられては困る。

大丈夫だよ。俺を信じろ？

信じろ……。随分安い言葉を使うもんだな……。俺自身もその信用って言葉で、どれだけ損をしたか。

『……本当？』

本当。本当。それに、もしそいつが起きたら、本で殴って寝かして良いぞ？

その方が俺も動きやすいし。起きられて、質問攻めは困るからな。

『良いの？』

OK。OK。

『うん……。分かった……。それで、どうしたの？』

ミミに尋ねられ、俺は頼み事をする。

いやあ、それがね。今、迷子になっちゃってさあ。だから【古書】の本棚から地図の本取って教えてくれないかい？

『【古書】だね？分かった！』

この前初めて会った時、自己紹介し本の説明をしておいた。
俺はモノを覚えるのは早いが、忘れるのも早い。

『どの地図？』

卿宝学院って地図。

『これだね！？』

俺今どこに居るの？

『んー、第一校舎の化学室前だよ！』

なるほど。

それにしも情けない。この年で迷子になり、しかも10歳前後の
女の子に道案内を頼んでいる自分がさらに情けない。

『どこに行くの？』

俺の予想だと校舎裏だから・・・。

第一校舎の裏へのルートを。

『分かった！』

それにしても、ミミの頭の良さに吃驚だ。

この前初めて会った時に、こんな事を予想し、ミミに文字の読み
を教えた。

するとミミは、短時間で読みをマスターした。ミミの語学力は俺のそれを上回っていた。これは元が良いからなのだろうか？

『そこから真っ直ぐ行って、右にある階段で上に行つて！』

下じゃないのか？

『その階段下に行つたら外に出れないの。だから一回上に行つて、違う階段で下に行かないと！』

この学校を設計した奴は誰だ？避難する時大変だろ。

分かった。

『そしてね、上に行ったら、左に曲がって、真っ直ぐ』

了解。

『ねえー、ねえー。ミミちゃんとお手伝い出来てる？』

おう。凄く助かってる！

『えへへ』

俺が助かってると言つと、ミミは嬉しそうに笑った。なんとも可愛らしい。

俺はミミが教えてくれた通りに道に行く。

この前にある階段で下に降りて良いのか？

『うん！下に降りたら後はもう分かるよ？』

了解。ミミお疲れ様。

『また何かあつたら読んでね？』

直ぐ呼ぶよ。

『えへへ』

最後にミミは笑って会話は終わった。
直ぐに呼ぶと言うのが嬉しかったのだろうか？

俺は階段を下りた。すると、靴箱の前に着いた。

「どんな構造だ？」

本当に設計者の意図が読めないな。

さてと、行くか・・・。

俺は校舎裏に向かった。つまりは探し人を見つけにだ。
でもまあ、校舎裏と言えば、定番のあれだが。

「チガウ・・・コイツモ・・・チガウ」

低くかすれた声。

暗闇の中、その声の主は嘆いた。そして激怒した。

「ナンデ！ナンデ！ナンデ！ドコニッタ！？ドコダ？ドコダアアアアア！」

叫ぶ声の主。その声の主の前に、誰かが倒れている。

だが、人と呼べるモノではなくなっている。赤い液体が流れ出る傷口は、無惨にも体中にあつた・・・。

呼び出された。でも、この学校の奴じゃない。この学校で俺を呼

び出すのは、櫛木屋慧ぐらいだ。

教師も俺の事を滅多には呼び出さない。

何故なら、俺がこの学校では珍しい、不良って奴だからだ。
自分で言って少し恥ずかしくなる・・・。

で、俺を呼び出したのは、他校の不良だ。

色々櫛木屋の命令で他校の不良を潰していたら、目をつけられた。
面倒な事だ。

「オイ！獅子旗よう。テメエー最近調子に乗ってんじゃねえか？」

金髪ロン毛の男が、言ってくる。でも無視だ。面倒だから。殴りかかってきたら殴り返えせば済む話だ。

ところで、何故俺が他校の生徒に呼び出されたのに、この学校の敷地内かと言うと、この学校が馬鹿デカイからだ。

下手に違う所に呼び出すより、この学校の敷地内に呼び出した方が見つからないし、通報もされづらい。その為、この不良達はわざわざここまで来たって言う事だ。

数は5人。一人相手に恥ずかしくないのだろうか？これでは、一人では勝てないから人数集めましたって、言っているもんだ。

「オイ！聞いているのか！？」

金髪ロン毛の隣に立っている、赤髪短髪の男が叫ぶ。
随分髪の毛の色にレパートリーがあるもんだ。

だが、五人なら勝てるかな。それぐらいは余裕だ。

「オイオイ？まさか勝てるのか思ってるか？」

金髪ロン毛が前に出ながら言う。

そしてら金髪ロン毛は、後ろにいるアフロもどきに言った。

「オイ。もう良いだろ？」

そう金髪ロン毛が言うと、アフロもどきが頷き、後ろに走って行った。

4人になった。潰しやすくなるのは好都合。

すると、俺の予想もしない事が起こる。

アフロもどきを先頭に、何十人の奴等がやって来た。

オイオイ……。これはいくらなんでも……。

つまりは伏兵か？いやいや、多過ぎるだろ。一人相手に何十人つて……。

しかもこの伏兵を出すタイミングも悪過ぎだろ？それだったら最初から居ろよ。

「怖氣ついたかあ？獅子旗？」

ウザいなこのロン毛……。

コイツ先に倒せば終わるかな？

「おおゝ居た、居た！」

後ろから声がし、振り返った。
……何で？

校舎裏、校舎裏……こっちな。

無事に校舎裏に着たが、まだ見つからない。
ここじゃないのか？まさか第二校舎とか？

それは困るなあゝ。面倒だし。

「………聞い——」

ん？声が……。おっ！ビンゴなんじゃないか？

これ曲がつたところか？

俺は覗いてみた。

・・・他校らしい奴が五人と・・・おおゝ居た。獅子旗藤太郎。

んゝ、どんぐらいか見てみたいから加勢はしなくて良いか。あんな奴等に負けるならダメだしな。

俺は覗き見を続行。

すると、金髪ロン毛の男が、後ろに居るアフロもどきに何かを言っている。

それにしても、髪のリパートリー多いな。

すると、アフロもどきはどこかに行ってしまった。

4人か？それなら余裕だろ。

すると、アフロもどきを先頭に、後ろからぞろぞろと何十人の男共がやって来た。

オイオイ・・・多過ぎだろ？

それに出すタイミング間違っただけ？それなら最初から居ろよ。

これは・・・流石に一人はキツイだろうなあゝ。

加勢・・・してやるか。

ぶつちやけ、俺自身が誰かを殴りたかったただけだけど・・・。

「おおゝ居た、居た！」

俺はワザとらしく、手を振りながら獅子旗藤太郎の所へ歩いて行く。

俺を見た、獅子旗は間抜けな顔をしていた。

当然だろう。榎木屋髯はこんな所に来るような奴ではない。アイツは裏で操って甘い汁を啜る、変態ロリコン野郎だから。

「な、何でお前が・・・？」

小声で獅子旗が俺に尋ねる。

少し演技しようか迷ったが、その必要は無いと判断し、マコトで行く事に。

「お前を探してたんだよ」

コイツからは想像も出来ない口調の荒さだったのか、獅子旗はまだ間抜けな顔をしていた。

「訳わからねえーよ。何でお前が・・・榎木屋が俺の事を」

「榎木屋？違えーよ」

俺がそう言つと、獅子旗は異常者を見る様な目で、俺を見る。

「何言つてんだ？お前榎木屋だろ？」

説明をはぶりたかったが、説明しないと色々と面倒だ。

「違う。俺は、マコトだ」

「はあ？」

「榎木屋隼と人格を切り替えた」

「えっ・・・榎木屋って二重人格とかなのか？」

「そうであってそうじゃない」

俺と獅子旗の二人が会話を始めてしまい、他校の不良共が取り残されてしまった。

その事に気付いた金髪ロン毛が叫ぶ。

「オイオイ、俺等の事忘れてんじゃねえの？」

そう言って前に出ようとした為、俺は手を前に出した。

「今話してるからちょっと待て」

俺がそう言っくと、金髪ロン毛は「お、おう」と納得した様だ。

・・・馬鹿なのか？

まあ、そんな事はどうでも良い、説明せねば。

「詳しい話は後ですが、俺はマコトだ。でも、コイツの別人格ではない。強いて言うなら、違う存在だ。ただ、今はコイツの中に居るだけで、身体は違う場所にある」

俺はコイツと言った時に、自分の親指で心臓を指した。

「な、なんかのSFか？最近そんなジョークが流行ってるのか？」

まだ理解できないか。当然だ。コイツの理解力が可笑しかったんだ。普通ならこうなる。

「ジョークじゃない。事実・真実だ。俺は——」

説明しようとした時に、赤髪短髪が痺れを切らして叫ぶ。

「何やってんだよ！？ぶっ殺すゾ！？」

「黙れ！」

俺は思わず叫んだ。

それには他校の不良達も驚いて、アホな顔をしている。

そして、獅子旗も驚いた顔をしていた。

当然だ。優等生の格好をした男が、ドスのきいた声で叫んだのだ。驚きもする。

「お、お前・・・本当に」

俺は獅子旗を見た。

「信じるのはお前だ。だが、信じてくれるなら、俺の右に居ろ。俺と共に行動しろ。俺には、コイツと違ってお前が本当に必要だ」

必要と言っ言葉効いたのか、獅子旗は少し涙目になっていた。

「ヨシッ！おい！獅子旗・・・いや、藤太郎！お前に背中を預ける」

臭い台詞だが、こんな場面ではこんな言葉も出てしまう。
少し俺のテンションも上がっているみたいだ。

「あ、後でちゃんとした説明しろよ？」

獅子旗改め、藤太郎が俺の後ろに立ち、言う。

「分かってるって・・・」

俺はかけていた眼鏡をはずし、片手で握り潰した。

コイツの握力では無理だと思っていたが、どうやら人格が俺に切り替われば、ちゃんと俺になるみたいだ。

それに、今の俺にはコイツみたいな頭脳は持っていない。

成程・・・まあ、喧嘩が出来るなら何でも良いが・・・。

眼鏡をとっても、視界はぼやけてなかった。俺自身は目が良いからだ。

容姿は違うが、完璧に俺って事か・・・。面白いな。

そして俺は、両手で前髪を掻き上げながら、言った。

「お前等・・・全員ここで終いだ！！！！」

そう叫び俺は突っ込んで行った。

第4話 第1章・【神隠し】編Ⅱ不良到来（後書き）

不眠症になりかけの龍門です。

ええー今のところ後書きに書く事がないので・・・登場人物の名前のイントネーションを

檜木屋 Ⅱ 殺し屋

筑波 Ⅱ 鍛冶屋

獅子旗 Ⅱ どこそこ？

みたいな感じです。あつてるかな？自身はない。もしこの中のキャラの名前を言う時（あるかそんな時？）使ってみてください。

それでは、無駄な事してないで。

次も読んでください。

第5話 第1章・【神隠し】編Ⅱ過去説明（前書き）

ヤバイ・・・神隠しが全然絡んでない・・・。
次ぐらいから・・・多分

てか、彗出てない。まあー良いか。

第5話 第1章・【神隠し】編Ⅱ過去説明

目を疑った。

『榎木屋慧と人格を切り替えた』

頭が可笑しくなったとしか思えなかった。

それに、榎木屋は周りが言う様に天才の部類に入る男だ。そんな男だからこそ、そんな事を言っただ事に、違和感があった。

そして、何よりも――・・・。

『――お前が本当に必要だ』

この言葉だけで、俺は全てを信じてしまったのかもしれない。絶対に榎木屋慧が言わない言葉。それを、榎木屋慧の姿をした男が言った。

俺は、もうこの男の事を信じているのだ。

「コイツとなら・・・」

思わず呟いた、孤独でしかなかった俺が・・・。

「何だコイツッ！！！」

無双と言っのだろうか？この状況は？

マコトは興奮していた。最近喧嘩と言っ喧嘩は全くしていなかった。

数で圧倒的に負けていると言っ状況が、更にマコトのアドレナリンを分泌させる。

「どうした？どうした？どうしたああああ！！！！！」

目の前に居る奴の右頬を殴りながら叫ぶ。

喧嘩と言っのは、冷静で居るよりも、壊れてしまった方がやりやすい。

とび蹴り・回し蹴り・裏拳・後はひたすら右ストレート。

「ああああああああ！」

金属バットを振り回し、叫びながら男が突っ込んで来る。

その男の顎に軽く拳を当てた。男はグラつき、その場にへたり込

む。

「数だけか？」

思わず呟いた。まあ、こう言う場合は数に頼った雑魚と相場は決まっているが。

マコトは藤太郎の方を見た。

「フンッ！」

エルボーを食らわせ、その後直ぐに違う男の顔面に膝を入れる。

「流石に慣れているな・・・」

思わず感心した。やられていたら加勢してやろうかと思ったが、これ位の相手なら藤太郎一人で十分だろ。

「ドコ見てんだヨオオオオオオ！」

赤髪短髪が叫びながら走って来る。

鼻血が出ている。あつ、さっき俺が殴ったんだっけか？

猪突猛進。マコトはもう一度鼻を殴り、沈めた。

「寝てる・・・雑魚」

そして捨て台詞の様に呟く。

もうそろ・・・かな？

マコトは辺りを見た。残りは金髪ロン毛とアフロもどきだけ。

「おい！藤太郎！お前にロン毛やるわ」

藤太郎にそう言うと、藤太郎はコクリと頷いた。

「ヨシ・・・じゃーやるか？アフロもどき？」

俺がアフロもどきを見て言う。

挑発するつもりであだ名を言ったが、アフロもどきは至って平然としていた。

それを見て、思わず感心してしまった。

そして、指を鳴らす。

「良かったよ。あのロン毛を藤太郎にあげて・・・お前が実質一番か」

マコトがそう言うと、アフロもどきは左頬を吊り上げ、笑った。

「よろしく・・・マ・・・コト？」

アフロもどきは首を傾げながら、マコトの名前を言う。
それに、マコトも笑顔で答える。

「よろしく。アフロもどき」

アフロもどき・・・長いからアフロで良いや。

そのアフロが姿勢を低くしながら突っ込んでくる。

「んなっ！レスリングか！？」

寝技主体の格闘技。

得意分野に引き込もって事か！？

思わずアフロのタックルを食らい、後ろに倒れる。それと同時にアフロがマウントを取り、拳を振り上げた。

「総合格闘技か!？」

マコトがそう言つと、アフロはニヤリと笑つて、拳をマコトの横っ腹に食らわせた。

「ぐはっ！」

流石にこれはキツイ……。てか、格闘技経験者かよ！大人しそうな顔して、エゲツねえ……。。

アフロはゼ全然ペースを落とさず、拳をマコトの横っ腹に食らわす。

マコトはその痛みに耐えながら、反撃の機会を待つ。

すると、アフロが一度拳を下ろした。

来た！

マコトはアフロの手を掴み、小指を折る。
いきなりの激痛にアフロが叫ぶ。

「ぐあわあああああああ!!!!!!!!!!」

アフロは叫びながらマコトの上から転がり降りる。そして、のたうち回っている。

マコトはゆっくり立ちあがりながら、言つ。

「小指折れれば、拳作れないだろ？」

そうマコトが言うが、アフロは痛さのあまり、叫び続けてマコトの話なんて聞いてはいなかった。

「沈め」

マコトは思いっきりアフロの腹に蹴りを入れた。

「ぐふぁ！」

アフロはそのまま気を失った。

「流石にあれだけのパンチは痛えーよ……」

マコトは横っ腹を摩りながら呟く。

「ポゲッ！」

気持ち悪い声を出し、金髪ロン毛は跳ばされた。

「おお、終わったか」

マコトが藤太郎を見ながら笑う。

「お前……本当に違っただな」

藤太郎が関心か、驚きかは判らないが、そう呟く。

「だから言っただろ？俺はマコトだ」

そう言い、マコトは拳を作り、藤太郎の前に突き出した。それに、藤太郎は一瞬戸惑ったが、同じく拳を突き出し、拳と拳をぶつけた。

二人は笑いながら、校舎裏を後にした。

「成程……」

藤太郎が腕を組みながら頷く。

学校を出て、近くのファミレスに寄り、事の説明をした。

直ぐには理解出来ないだろうと思っていたマコトは、藤太郎の柔軟性に関心した。

マコトはハンバーグを切り、その一切れを口に運ぶ。

「じゃー、そのマコトの身体を探すのか？」

藤太郎はマコトを見ながら尋ねる。いや、確認する。

「そうだ。でも、直ぐには見つからないだろうよ」

マコトがそう言つと、藤太郎は不思議そうな顔をし、尋ねる。

「それはどう言つ意味だ？」

マコトは一瞬言つか迷った。これを言つてしまうと、多分完全に巻き込んでしまう。手伝ってもらつのではなく、加担と言つた関係になつてしまう。

マコトは暫く黙つて考えた。

マコトが言つか言わないか迷っているのを察したのか、藤太郎が言う。

「俺は大丈夫だ。今俺は自分の意思でここに居て、マコトの話を聞

いて、そして尋ねている。全ては俺の自己責任だ」

思わず言葉を失った。

・・・人選は間違ってたかったか・・・。

思わず微笑んでしまった。それを見た藤太郎が、「どうしたと？」尋ねる。

「いや・・・俺の目に間違えはなかったってな」

そうマコトが言つと、一瞬藤太郎は考えたが、自分の事を言われていると気付き、少し恥ずかしそうな顔した。

傍から見ると、少し危ないかもな・・・あっち系かと思われる。

マコトは思わずそう考えてしまった。

「それで、マコト。お前はと言った人間だったんだ？」
ダイレクトに尋ねてきた。

「んー、どんな言われても普通の男性だったよ、俺はな。ただ、周りが普通ではなかった。」

マコトは続ける。

「親父はヤクザの幹部。母さんは元刑事だよ」

「ヤクザに元刑事？」

藤太郎は驚いた声を出す。

「母さんが親父に一目惚れしたらしくてな。でも親父ヤクザだったから、刑事辞めて結婚したんだと」

「何か凄いな・・・」
藤太郎が呟く。

「んで、問題はこつからだ・・・俺が中学生になった時、親父の組が潰れた。いや、正確には潰した・・・俺がな」

俺はフォークでハンバーグを指しながら言う。

藤太郎は意味が良く解ってなく、尋ねる。

「お前が潰した？どう言う意味だ？」

「親父と同じ、組の幹部の奴に騙されて、組の大切な書類と言うやつをその男に渡してしまつて、そのせいで他の組に潰された」

「・・・その親父さんは？」

「その裏切った奴を追っているよ・・・日本中。組は潰れたんだけど、親父は昔のヤクザみたいに、義理や人情言っている人で、自分を助けてくれた組長が死んでしまったんだ、責任感じたのか、復讐なんかは分からないがな」

いつも親父に言われた。『人を裏切るな。もし裏切ったら、俺がお前を殺す』と。子供に言う事ではないのだが、俺はそう言ってくれた親父が好きだった。子供としてではなく、一人の男として言うてくれて、嬉しかった。

「で、何で自分を始末しなくちゃいけないんだ？」
藤太郎が尋ねる。

「ん、まあ、簡単に言うと、俺は爆弾だからだ」

「爆弾？」

「俺の脳には、ヤクザの記憶とか警察の記憶とか、結構ヤバいのが入っている。それを使われるとヤバい。だから、始末する」

「取り返そうとは思わないのか？」

「普通ならそう言う考えになる。だが、俺はそうではなかった。

「俺は・・・親不孝だからな。それに・・・戻れない理由があるんだ」

俺がそう呟くと、何かを察したのか、藤太郎はそれ以上尋ねてこなかった。

「・・・分かった。もっと詳しく知りたいと言うのが本音だが、これ以上尋ねる理由はない。俺はお前に必要と言われた。その言葉を信じる」

ホント・・・大した奴だ。得体も知れない奴の為に動ける。親父・・・アンタみたいな奴がここにも居るよ・・・。

「頼む」

俺は頭を下げた。これは、詳しい事を説明出来ない俺からのせめてもの礼儀だ。

「そ、そんな頭何て下げるなよ！」

藤太郎は顔を赤くしながら首を横に振った。

ホント・・・そっくりだ。

第5話 第1章・【神隠し】編Ⅱ過去説明（後書き）

ええー色々無理矢理な展開。

マコトの身内の話はこんなところで出すつもりはなかったのですが、藤太郎を信用させる為にはここで話さないと駄目だと思い、話す事に。

ええー次ぐらいから神隠しの事件解決みたいな感じの流れになっていきますが。

作者本人綺麗に物事が解決するのがあんまり好きではありません。

なので、謎を残して解決とか、何か後腐れが残る終わり方とか。でも、そんな内容でも明るさを出したいと思います。

他の作品が少しシリアス度を出し過ぎてるので、推理と言ってもコメディが多めにいきたいです。

では、次もよろしく願います。

それと、誤字脱字の指摘がありましたら言って下さい。

追伸……。

替出てないよね。彼も主人公だけど……

ざまあゝ（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3410k/>

アンラッキーなラッキーボーイ

2010年10月9日13時36分発行